

俳句雜誌



2019・6・7

SORA 85号

阿蘇

柴田佐知子

刈り伏せし草に阿蘇ゆく雲の影

塩舐めて夏野の牛となつてをり

寄せてくる夏霧牛乳の白さ

牛ちらしうねり豊かな夏野かな

的となる人はもうなき草矢射る

馬駆けて白光となる大夏野

土用照り貌を四角に牛怒る

柄長啼く樹間に透くる湖の色

くつついて並ぶ目白の同じ貌

真清水に浸せし指の若返る

石仏の老いひたすらに椎の花

暮れてより冥界に立つ瀧柱

草原の星空思ひレース編む

福岡 高倉 和子

風揚げのつまづくやうに走り出す

猫の子に日向の藁の匂ひかな

半眼の仏ばかりや冴返る

切株の匂ひ新し鳥の恋

手の届くところで終はる春の夢

石鱗玉大地を少し潤して

スクランブルエッグぼろぼろ花粉症

手をつなぐほどの近さやさくららの夜

東京 中田みなみ

うつむきて驢馬の一周花曇り

鉄棒に鼻のせ象の花疲れ

口開けて象を見てをる遠足児

風光る老いし象の餌みぢん切り

象の前で象さんの歌遠足児

柳絮とぶ休み時間の調教馬

罰受けてをるかに羊刈られをり

夏めくや力士の下駄が橋鳴らし

長崎 荒井千佐代

福岡 柴田志津子

初夏や医師の一言異常なし

鶴帰る先頭のみが鏡持ち

服に付く螢とすこし歩みけり

柳絮飛ぶ川沿ひの家ささくれて

戦傷を語らぬ夫や夏の蝶

裏口の舟より人や雛まつり

代り映えせぬ病室の更衣

笹鳴きや寢墓と呼べど石二つ

書けば字の歪む齡や夜の秋

葬列と同じ方へと鶴帰る

病室に友だちができ夏夕べ

鈍行の停車の長しうららけし

水足せば更にひらきし水中花

春日や屋根より路地へ雀降る

身の丈にあはぬ話をして涼し

耶蘇村の石積集落鳥雲に

埼玉 服部 早苗

鮪や嬢座の脇に猫の座も

まんさくは振れ麵棒は休みなく

HBの芯を尖らせ寒戻る

うぐひすの声放つとき尾を張れる

虫くひの観音祀る鳥雲に

鎖骨まだ見えぬ少女や磯開

猫飯といへど浅蜷の二三粒

宮の梅ほつほつ猿の宙返り

福岡 岸 洋子

風花や音ひとつなき楽器店

陽炎にさへもつまづく齡かな

春光を仏の夫と分け合へり

ほつれ毛ほどの風をはらみて春蚊出づ

いつよりか身に添ふ歩幅犬ふぐり

鳥帰る産土に抛りどころなし

唄ひつつ遊びしころよたんぼば黄

福耳の祖父に抱かれ雛の膳

北九州 深川 淑枝

早潮の揉み合ふひかり若布生ふ

船に網積むや帰る日近き鴨

鱧舟巨船の余波に煽られて

海市消え浚漉船が土砂揚ぐる

捨舟の竜骨の弧や春の雷

船笛の尾を曳く牡丹ぐもりかな

デッサンの鉛筆の音風光る

早春やみづいろに塗る画布の空

広島 戸栗 末廣

初七日の席ににじみて雪の富士

骨壺と長き余寒を踏みにけり

葬のあと遠くの鴨を見てみたり

梅の蓄泪のやうにひしめける

竹山のなかの一樹の桜かな

咲ききつて静けき彼岸桜かな

夜は蔵の暗さのほどに雛の段

電話機に留守を言はせて春炬燵

福岡 角野良生

草千里枯野千里となりにけり

蓮枯れて筋金入りの骨残る

凍滝の凍て拒むかに水の音

塩鮭に泪のあとのありにけり

一の矢を淑気もろとも引き絞る

梅東風やもう割り込めぬ受験絵馬

梅真白むかしの道はよく曲がる

かげろふやわれもかぎろひるるならむ



糸島 小林 朱 夏

粽解く父が名付けし子が並び

牡丹切りつまらぬ家となりにけり

適当な返事してゐるハンモック

白雨一瞬盛り塩を崩しけり

関東や首絵のごとき雲の峰

太宰府 山 本 則 男

地を踏まぬ基督の足草萌ゆる

美しきままに踏絵の残りをり

雲海を抜け出す阿蘇の揚雲雀

この奥も修験の径や落し角

末黒野や生あるものは動き出す

北九州 横 田 敬 子

馬鈴薯植うコルクのごとく乾かして

大根を引きたいと来る隣の子

福寿草踏まれぬやうに咲きにけり

タンカーの余波すれすれに春の鴨

六畳間使ひ切つたる雛飾

北九州 児 玉 充 代

春寒やひとひねりして反古と化す

野遊びの水筒ろろんと鳴りにけり

揺れながら歪みを正すしやぼん玉

生まれたる蝶にこの世の青世界

遠く来てひと日の旅や花辛夷

長崎 松尾 龍之介

ぼつぺんやマカオ・長崎・エスパニヤ

水温む鯉に仏陀のどぢやう髭

日脚伸ぶ水栽培の真白き根

鳥帰る水が蒸発するやうに

御河童のうしろ剃り跡春の風

兵庫 林 徹也

亡き母の椅子で夕べの新茶くむ

点滴の終の雫や春日差

春灯やビルの合間の比翼塚

リハビリの積木遊びや春の雪

きつちりと名を書く古稀の大試験

大野城 森 田 明 成

冴返る夜の病院の長廊下

靴ならぶ合格祈願待合所

雑談を理路整然と受験生

麗かや村の駅舎は小間物屋

若者は着古しが好き山笑ふ

福岡 永 淵 惠 子

もどり寒病者はいつも見おろされ

きさらぎの死者はチューブを解かれけり

朧夜やうすうす伸ぶる死者の髭

春昼のあらはなる骨拾ひけり

はらからの末子逝きたるさくらかな

須 惠 苑 実 耶

石けりの平らな石や柿若葉

麦の秋筑後平野は継ぎはぎに

暮るるまで夏うぐひすの自在なり

またすぐに箒目隠す春落葉

粽解く藺草の匂ひ笹の匂ひ

千 葉 原 友 子

探梅の一行家の裏通る

屋根替への職人に空晴れ渡る

村人のけふは若武者野火放つ

清明の雨迎へ撃つトタン屋根

青空をさんざん待たせ豆の花

長 崎 坂 口 晴 子

猪運ぶ真中の撓む担ひ棒

なんとなく爪先あるき雛の間

磯遊まづ袖まくり裾まくり

椿咲くよこ向く地向く天を向く

植樹祭大きな鳥が空をゆく

熊 本 松 田 明 子

祠より御灯みあかりもるる午祭

河川敷大きく使ひ植木市

高嶺風吹き込んでくる農具市

枝先に風行き渡る雪柳

日当りのよき部屋雛に明け渡す

粕屋 吉 田 葎

春告鳥王墓は未だ開かれず

雄鶏のながき一歩や水ぬるむ

巢立鳥すこし跳んでは羽たたむ

草は草根には根のいろ山笑ふ

引綱の形にひかる螢鳥賊

福岡 栗 原 京 子

ひだまりに人の寄り来る梅日和

春めくや菜の外側は餌にして

おでかけは怪獣つれて葱坊主

春満月異端の宗徒匿はれ

車にも塔にも登る恋の猫

宮崎 田 代 民 子

光ふるごとき囁り光悦忌

病棟五階春暁のカーテン引く

リハビリの作業療法葎きざむ

夕長し配膳室の大薬缶

花冷や湯浴み疲れの指ほぐす

直方 石 橋 幾 代

脱ぎ終へてからだ醒めゆく花衣

落椿たちまち水にさらはるる

ほろ苦き土筆や夫のをりし日も

下萌や魚の跳ねたる魚籠の中

太き声残し恋猫走り去る